

学生部に優秀賞

第22回地域の防火防災功労賞

長年にわたり地域と協働できる防災体験イベント「BOSAIフェア」の強化や防災力の向上に努める本学学生部の取り組みが、東京消防庁主催「第22回地域の防火防災功労賞」で優秀賞を受賞した。

地域の防火防災功労賞は、町会・自治会・学校・事業所などの防火・防災に関する活動を表彰し、都民に紹介することを目的に制定された。今回は53件の応募があり、最優秀賞3件、優秀賞4件を含む19件が選出された。

本学は2005年に千代田区と大規模災害時における協力基本協定を締結。以降、学生部が中心となって学生以外も参加



賞状を受け取る佐竹学生部長(左)

「BOSAIフェア」の実施など、地域との連携を深めてきた。また、10年にわたる活動を通じて、学生部傘下団体としてSKV(専修神田ボランティア)を設立し、学生が災害に備えて知識や技術の修得に励んでいるほか、地域のイベントにも積極的に参加してきた。

選考委員会からも長年にわたる地域を巻き込んでの活動を評価された。

表彰式が1月15日、千代田区内で行われた。賞状を手にした佐竹弘靖学生部長は「これまでの成果を評価していただき、本学にとって誇りとなる。防災の意義を考えながら、今後も継続して活動していきたい」と話した。

商・石川ゼミ 公共政策フォーラムで入賞



入賞した石川ゼミチームと石川教授(右から2人目)

地域の課題に即した政策を提案する政策コンペ「フォーラム2025 in 養父」が12月6、7日、兵庫県養父市で開催された。

フォーラムは日本公共政策学会が毎年開催しており、開催自治体が抱える地域課題に、大学生が解決策を提案する。今年、養父市のテーマは、中山間地のまちづくり。全国13大学から15チームが参加した。6日の予選を通過した6チームが、翌日の決勝戦でプレゼンテーションを行った。

石川ゼミチームのメンバーは、中倉心菜さん、慶本拓実さん、鈴木楓真さん、茅根奈美さん、日向隼輔さん、嶺井羽琉さん、山本美緒さんの7人。市内で増加する耕作放棄地に着目し、市民・地域・公共が一体となって、長期的な関係性を育む仕組みを提案した。具体的には、小学生から成人までの10年間の、稲作体験や成人式での記念米・記念酒を通じて、若者の定着と地域コミュニティの再生を目指すアイデア。

ゼミではマーケティングを学んでおり、政策立案は初めての挑戦。メンバーは「市外から人を呼ぶアイデアではなく、地元若者を対象にし、実現可能性、持続可能性を強く意識した」と語る。

約半年間の取り組みで、企画構成力、文章やスライドのまとめ方、発表の工夫など、成長が実感できたという。「チームの絆も深まった。ゼミ活動の集大成となった」とうなずきあった。

第24回ベンチャービジネスコンテスト 鳳賞に寺澤さん(商2)



寺澤さんの熱のこもったプレゼン

実現可能なビジネスプランの立案を通して学生が提案した外国人ハイカプレナーシップを養う第24回ベンチャービジネスコンテストのプレゼンテーション大会が12月6日、55組がエントリーし、書類審査、プレゼンテーション審査を通過した8組が本戦に出場。本学出身の起業家や教員、起業支援の専門家らの前で、堂々とビジネスプランを発表した。

「トレッキングが趣味で、自分の好きなことをプランに反映させた」と寺澤さん。外国人観光客に人気のハイキングやロングトレイル(歩く旅)に着目し、「アドベンチャーリズムには可能性がある」と熱のこもった語り口でプレゼンした。

寺澤さんは起業も視野に「プランの実現に向け、見識を深めたい」と挑戦を誓った。

経営・岩田ゼミ

長野県のイベントで「BENTO」企画・販売



長野県・車山高原のイベントに参加したゼミ生

経営学部・岩田弘尚ゼミでは、長野県の特産物(産物の特性を作り出す自然環境やノウハウのこと)を生かしてナチュラルハムを製造する「ジャンボン・ド・ヒメキ」と産学連携を行っている。

その一環で10月19日、長野県・車山高原で開催された「アロンフランセ車山」で、ジャンボン・ド・ヒメキのブース運営補助と、岩田ゼミ商品開発チームが企画・開発・仕入れ・製造を一貫して担当した「BENTO」の販売を行った。

アロンフランセ車山は、フランス車とフランス文化の祭典。「BENTO」は弁当のことで、フランス語の辞書にも掲載されている。フレンチシェフの経験を持つジャンボン・ド・ヒメキの藤原伸彦氏の監修のもと「BENTO」

地元食材生かし 5カ月かけ開発



信州産ブランド豚やキノコなどをふんだんに使った「BENTO」

を企画。長野県産食材の持ち味を生かすフレンチのエッセンスを加え、彩り・味わい・デザインなどにこだわりの、5カ月かけて開発した。

イベント当日は40食を用意して挑んだ。不安もあったが、多くの来場者がブースに立ち寄り、「野菜

菜たっぷりでうれしい」「冷めていてもおいしい」といった温かい言葉をいただいた。

最終的に「BENTO」は完売。会場では、お客様が商品を手に取り、笑顔で味わう姿を目の当たりにし、何にも代えがたい励みとなった。

今回の成功の要因は、ゴールからの逆算思考による綿密な計画と市場調査、関係者とのこまめな対話によるものが大きいと考える。

一方、プロモーション活動の面では、声掛けマニュアルの不足など反省すべき点もあった。

今回の学びを糧に、さらに社会に貢献できる人材へ成長していきたいと強く感じている。

(経営学部3年 増田丈一郎・青山萌乃美・落合ひかる)

21チームが活動を報告



8カ月間の活動を報告したチョップバリューチーム

問題解決型チャレンジプログラム成果発表会

学生が学部や学年の垣根を超えてチームを組み、企業や自治体、NPO法人と連携して実社会の課題に解決策を提案する「問題解決型チャレンジプログラム」の成果発表会が12月13日、神田キャンパスで開かれた。

20回目となる今回は、地域活性化や企業のPR戦略、イベントの企画・運営などの20プロジェクトに、21チーム・約120人が参加した。活動は約8カ月間にわたり、学生たちは協力して、問題解決力や人間関係構築力を鍛えた。

チョップバリューチームは、使用済み割りばしのアップサイクル活動の認知度向上に取り組み、生田キャンパスに割りばし回収ボックスを設置。回収方法や目的が書かれたポスターも掲示し、約2800冊を回収した。一役を果たすだけでなく、チームの状況に応じて協力し、柔軟に対応することの大切さを考えられたと報告した。

各チームの発表後には、受け入れ先企業・団体からのフィードバックがあり、学生たちの奮闘をたたえ、ともに、アドバイスを送られた。